

アンテック

備前焼の瓦で門塀改装

有名作家がプロデュース

陶芸機器販売の(株)アンテック（瀬戸内市邑久町豆田116-3、末石建二社長、資本金1500万円）は、このほど、備前焼製の瓦を試作販売した。昨年夏から展開している備前焼レンタル事業の人脈を生かし、若手作家で組織する備前陶心会前会長の平川忠氏がプロデュース。今後、屋根用建材など実用化への研究を進める。

備前焼製の瓦は、閑谷学校（備前市）で使われているが、ろくろを使わないため、製作に手間が掛かり、建材向けとしては高価だという。同社は岡山市内の会社役員から相談を受け、平川氏を紹介。半年間で約500枚を作り上げた。

瓦は会社役員の親族が、熊山神社（赤磐市勢力）の門塀改修で寄付。門塀は全長約100mで、塀の上に約300枚の瓦をかぶせた。水を吸わず、凍結した際に割れる心配もなく、磁器に比べて

耐久性が高いのが特長。

末石社長は「焼き上がった際にひずみが発生し、品質の均一化が難しい。製造コストの問題もあり、屋根瓦など量産化への課題は多いが、備前焼の新たな用途を広げる取り組みの1つになれば」としている。



備前焼の瓦を使った門塀

平成19年2月5日
Vision岡山